

悪霊 第五部・砂上の王国

悪  
霊  
  
第  
五  
部  
・  
砂  
上  
の  
王  
国

【登場人物】

- 伊集院満枝…………… 日市の地主の娘  
猪俣佐和子…………… 満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事。党員となる  
増田小百合…………… 旧姓・安西。伊集院満枝の一年後輩  
佳代…………… 貧しい農家の娘。党のハウスキーパー  
喜代美…………… 女工。党に派遣されモスクワに留学  
李麗姫…………… 女性抗日バルチザン  
小沼健吾…………… 労働運動家。伊集院家の元小作人  
三沢…………… 党中央委員  
大橋多喜蔵…………… 党員。プロレタリア作家  
増田喬…………… 小百合の夫  
悦子…………… 家出した少女  
五郎…………… 不良少年  
加藤寅二郎…………… 脚本家  
江戸川…………… 探偵小説家  
田中少佐…………… 上海の謀略機関に属する陸軍将校  
「清朝の王女」…………… 田中少佐の「愛人」と噂される女性

昭和六年（一九三二）年十一月～昭和七年一月。東京市、満州、弘前市、上海

I

特別高等警察課。

これを略して特高と呼ぶ。反体制的運動家や団体を取り締まることを目的として設置された。

この時期、東京の警視庁特高課には四百人近い警官が配備されていた。予算も潤沢に注ぎ込まれ、緻密な監視網を敷き、拷問を辞さぬほど取り調べ方法は残酷を極めた。

反体制運動家たちから恐れられ、蛇蝎のごとく嫌われた特高警察を率いていたのが、特高課長の森本警部である。

家でした少女を追って上京した増田小百合が、直美という女給に会うために入った浅草のスワンというカフェで、猪俣佐和子を目撃していたその頃……。

新橋の小料理屋の狭い一室に、森本警部は独り手酌で酒を呑んでいた。四十代初めという年齢にも似合わず、額には深い皺が刻まれ、背中を丸めた姿は、辣腕の警察官というよりも、仕事に疲れたサラリイマンのように見える。

「お見えます」

襖の向こうで仲居が声をかけてきた。森本が、ああ、と気のなげな返事をする、襖が開いて現れたのは、三沢だった。

「党」中央委員である三沢が、不倶戴天の敵ともいえるべき特高警察のボスと何故会っていたのか、それはおいおい語られることになるだろう。

「どうかね？」

向かい合って座った三沢にお銚子を差し出ししながら、森本警部はなんの感情も籠もらない声で問うた。

「だいぶ、景気がよさそうじゃないか」

「お陰様で党員一万人獲得も夢ではない勢いですよ、つまり……」

三沢は杯を干しながら、いつもの闊達な笑顔で答えた。

「なるべく多く集めておいて、一網打尽……。あなたが手柄を立てる機会がもうすぐ来るってことすな、警部殿」

森本警部は鼻を鳴らして答えず、無言で自らの杯に酒を注いだ。三沢は面差しを引き締め、言った。

「これから、いろいろと事が起こりますよ」

「根拠は？」

「モスクワからの送金が途切れました」

無表情に聞いていた森本警部の眉がかすかに動いた。三沢は続けた。

「蒋介石の囲勦戦のおかげです」

従来、モスクワから「党」への資金提供は、上海の組織を通じて行われていた。ところが、国民党政権を率いる蒋介石が、国内共産党勢力の殲滅に力を注ぎはじめた。上海の組織も壊滅状態に追い込まれたため、モスクワからの資金が「党」に届かなくなったのである。

当時の「党」の運営は、モスクワからの巨額の資金援助と、「党」のシンパである作家や学者

ら文化人からのカンパが二本柱であった。そのうち一本がへし折られたことになる。

三沢は続けた。

「後は、文化人からのカンパが途絶えれば、ひとたまりもありません」

「うむ」

森本警部は遠くを見るような眼で頷いた。頭の中では、「左傾」文化人たちの大検挙を、どういう手順で行うことが警察官僚として正しい筋道か、忙しく計算がなされているのであると三沢は想像した。

「人間、貧すれば鈍する……金がなくなりや、なんだってやらかします」

「何をやらせるつもりだ？」

「いま、女を集めています」

「女？」

「ええ……女がらみ、エロがらみの事件が起これば、新聞もデカデカと取り上げ、世間の注目を浴び、党の評判は地に墜ちる。あんたも出世間違いなしだ」

「俺のことはいい」

森本は立ち上がり、懐から茶封筒を引き抜いて三沢の目の前に放り出した。

「当座の活動費用だ……それから、この店の支払いはすんでいるから、ゆっくり食っていけ」

そのまま部屋を出た。三沢は、茶封筒の中身を確かめ、一円札の枚数を数えた後、卓上に置いた徳利を握り締め、放り込むようにして酒を口中に注いだ。

酒を飲み干し、手の甲で唇をぬぐった三沢の瞳に、憎悪とも、自己嫌悪ともつかぬ、どす黒い

光が鈍く宿っていた。

「権力の……犬が……」

低くつぶやき、三沢はさらに酒を呷った。

同じ頃……。

浅草のカフェ「スワン」では、増田小百合と加藤寅次郎が、直美という女給を待っていた。

「さすがに売れっ子だねえ」

席を立つと、とたんに他のテーブルの客が声をかける。如才なく酔っぱらいたちの相手を務める直美を見ながら、加藤はため息をついた。

「女給として成功するには、ただ顔がきれいなだけじゃだめなんだ。どんなお客も、公平に相手して、嫌な気分を抱かせない。これが肝心なんだな。彼女は、人あたりもいいし、客を飽きさせない。長年この浅草で生きてきただけのことはあるね」

小百合は頷きながらも、視線は離れたテーブルで接客している猪俣佐和子に向けられていた。

I 高等女学院時代、小百合は一年先輩の佐和子を、伊集院満枝がただ独り心を許していたクラスメイトであり、秘かに接吻をかわす仲であることを知っていた。それだけではなく、川奈昭三を去勢して殺したのは、満枝にそそのかされた佐和子ではないかと疑っていた。

卒業と同時に、実家から姿を消した佐和子の噂は、小百合のクラスでも流れていた。新聞記者をしている東京の従兄を頼って家出したのだろうとの憶測が有力だったが、もともと、おとなしく目立たなかった佐和子のことを口にする女学生は、やがていなくなった。

その佐和子がないで、派手な化粧をして、浅草のカフェで女給をやっているのだろう。無口で、物堅そうな雰囲気を漂わせていた女学生時代との落差に、小百合は戸惑っていたばかりではない。なぜ、わたくしの行くところ、伊集院満枝の影がちらつくのだろうか……。

幸い、たまに眼が合っても、儀礼的な会釈が帰ってくるばかりで、佐和子が小百合を、同じ学校の同窓生として認識している様子はない。在学中は口をきくこともなかったのだから当然ではあったが……。

「お待ちせしました」

鈴を鳴らすような声に顔をあげると、小百合たちのテーブルのそばに、女給の直美がにこやかに立っていた。

「そうだった……。小百合は、スワンに来た理由を思い出した。家出した悦子を探すためではなかったか。」

猪俣佐和子に気をとられている場合ではない。

「忙しいところをすまないね」

加藤が指さした椅子に座りながら、今後ともご最良に、と頭を下げる直美に、小百合は、女の子を探しているんです、と身を乗り出した。

「悦子という名前です。十二歳です。弘前から家出してきた、行方がわからないんです」

訝しげな面差しの直美に、加藤が、小百合を手で制しつつ、諄々と説明した。

「そういうわけでね、手がかりがなくて困ってるんだ。直美さんなら、顔は広いし、何か知っているんじゃないかと、藁にもすがる思いで来たんだよ」

「申し訳ないけれど……」

直美は言った。

「思い当たることはないわ」

「そうかい？」

「このあたりじゃ、家出娘は珍しくないし、そんなこといちいち詮索なんかしませんしね」

「でも……」

小百合が口を挟んだ。

「まだ十二歳なんです。たった独りの肉親である父親に邪険じゃけんにされ、弘前の盛り場で出会った男の人を慕って東京まで出てきた、かわいそうな娘なんです。なんとかしてやりたいんです」

「そんなこと言われても……困るわ、私」

困惑する直美に、小百合はなおも追いつがった。

「お願いです。ほんのちよつとしたことでもいいんです。せめて、どんなふうに見せればいいのかだけでも、教えてください」

懇願する小百合を、直美はじつと見つめた。唇に薄い笑いが浮かび、すぐに消えた。

「どこのお嬢様か存じませんが……」

冷たさを帯びた声音に、小百合は水を浴びせられたように、身をすくめた。

「ここは、とても怖い町ですよ」

「君……」

口を挟もうとする加藤に見向きもせず、直美は続けた。

「ここで生きていくには、たとえ知っていても、口にしていいことと悪いことがあります。見ず知らずのお嬢さんに頼まれたからといって、気安なお返事はできないこともあるんですよ」

「では……」

不意に見せた水商売女の凄みにたじろぎつつも、小百合は言った。

「何か、ご存知なんですかね？」

直美は、唇の端を歪め、品定めするように小百合を眺めていたが、やがて横を向いて立ち上がった。

「では、これで」

そのまま去っていった。あの、と立ち上がる小百合の袖を、加藤が引いた。

「無理だな。あの女、結構したたかだ。何か知っていそうな様子だが、あの調子じゃ、簡単には口を割りそうにないね」

悲しげに面差しをゆがめて肩を落す小百合を、加藤は慰めた。

「今夜のところは引き上げよう。僕も浅草には知り合いは多い。いろいろ探りを入れておくよ」

はい……。

小百合は素直に頷き、悄然と出口に足を向けた。加藤が勘定をしている間、何気なく店内に眼をやって、思わず立ちすくんだ。

猪俣佐和子が、こちらを凝視していた。探るような眼つきだったが、すぐに眼を逸らし、隣に座る客に笑いかけた。

……気づかれたのかしら？

勘定を終えた加藤に促され、店を出ながら、小百合の心臓は早鐘を打っていた。

……どこかで見た顔だわ。

閉店後、狭い更衣室で、他の女給たちのからだに触れぬよう、窮屈な姿勢で着替えながら、猪俣佐和子は思った。

……思い出せない。でも、確かに見た顔だった。向こうも、自分のことを知っていそうだった。他の女給たちが直美を囲んでいた。なんだったの、あの女の客、と口々に訊ねた。家出娘を探して青森からやってきたんだって、と説明する直美に、佐和子は安堵した。青森には知り合いない。

しかし……。店を出る際に、眼が合ったあの女の狼狽ぶりが気にかかる。

今は、非合法活動に従事する身なのだ。しかも今後は、かなり危ない橋を渡ることになる。任務の妨げになりかねない要素は、避けておかねばなるまい。

せめて、正体だけでも知っておいたほうがいい。

タクシーをつかまえるために表通りに出た直美に、佐和子はなにげなく話しかけた。

「ねえ」

「なにさ」

「さっきの、家出娘を探していたという男のひと、誰かしら。どこかで見た顔なんだけど思い出せないの」

「ああ。男のほうは、水族館でやってるレビューウの台本を書いている人らしいよ」

「へえ、そうなの？」

「もつとも、家出娘を探してるのは女のほうだったけどね。彼は付添い人だって」

タクシーが停まり、直美は、さよなら、と手を振って乗り込んだ。

佐和子も手を振り、自分のタクシーを捕まえ、向島のアパートに走らせた。バッグを開け、この日に受け取った客からのチップを数える。

水商売はお金になる……。

世間は不景気で、貧しさのため子どもを売る親もいるというのに、女給の愛想笑いを得たいがために金を湯水のように使う連中がいる。馬鹿馬鹿しくはあったが、いずれ、自分たちの活動が実れば、ああいう軽佻浮薄な男どもは一掃されるのだと考えると、愉快でなくもなかった。

三沢の指示で、村野栄太郎の助手という役目から解放され、鶴沼から向島に移ってから半年になる。引越してしばらく何の音沙汰もなかったが、一週間後に三沢自身に呼び出された。

会った場所は、私娼窟として名高い玉の井の料理屋の二階だった。役所から鑑札（営業許可）をもらい、おおびらに看板を出している公娼街とは違い、普通の民家が肩を寄せ合うようにして並んでいるが、よく見れば、どの家も露地に面して大きなガラス戸がある。夜になると、そのガラス戸から見えるよう厚化粧した女たちが並び、男どもの品定めを受けるのだ。

昼間とあって、開いている店はない。迷路のように込み入った細い露地を、顔色の悪い女たちが無表情で歩いている。

「あの女たちが、夜になると白粉を塗りたくって娼婦に化けるといわけです」  
皺の目立つ背広に汚れた靴といういでたちの三沢は、二階から女どもを見下ろしながら言った。

「親の借金を背負わされた娘もいれば、夫の借金のかたに売られた妻もいる。小さな子どもを抱えている母親もいる。ごらんなさい、みな生気のない顔をしているでしょう」

佐和子は頷くしかなかった。三沢は続けた。

「ここに来る男たちもまた、わずかな賃金で過酷な労働を強いられつつ、貯めた金で女の肌のぬくもりを求めにくる貧しいプロレタリアート。どちらも、資本主義社会の犠牲者ですよ」

どんな苦境にあるかと、若い男は女性の肌を求める。そこに売春という世界最古の職業が成り立つ。富める者であれ、貧しき者であれ、性欲の檻かごからは逃れられない。われわれが、たたいを推し進めるにあたって、その真理を無視するわけにはいきません……。

三沢はそう言って、居住まいをただした。

「井上さん、あなたは、もつと危険な仕事につけてほしい、そのように、おっしゃいましたね」

「ええ……」

三沢が村野栄太郎の住処すまかに連絡レホに来た帰り、彼を駅まで見送りながら、佐和子は確かにそう言った。

「私は以前、モスクワにいたことがあります」

三沢は言った。

「そこで聞いた話ですが……スターリン書記長は、革命が成功する前に何をやっていったと思いませんか？」

「さあ……」

社会主義の祖国であるソビエト連邦の偉大な指導者の名を出され、佐和子は戸惑った。

「もちろん……革命運動に従事してらしたのでしょ？」

「そうです。しかし、その役目というのが、売春宿の経営だったのですよ」

佐和子は驚いた。世界中の社会主義者から太陽のように仰ぎ見られている指導者が、そのような汚い仕事をやっていたとは……。

「あるいは、反革命分子が流したデマかもしれない……。しかし、私はこうも思うのです。資本主義社会のなかで革命運動を展開する以上、先立つものは金です。スターリン書記長は、自らの手を汚しながらも立派に革命に貢献した。ただ、私はそれだけではないと想像しています」

「と言いますと？」

「男は、美しい女には弱い。酒が入れば、さらに気が緩む。書記長は、配下の女たちを、そのような仕事に使ったのではないかと思うのです」

佐和子は息を呑んだ。

色仕掛け、という言葉が脳裡に浮かんだ。

三沢は続けた。

「私は、売春宿を営むつもりはありません。だが、革命を成就させるためには、ありとあらゆる武器を使うべきだと考えています。それが法に触れるものであっても構わない。そもそも革命は、あらゆる犯罪のなかでも最大の罪です。敵に打撃を与えられるものならば、どのようなものであれ、武器を選ぶのに躊躇ためらう理由はない」

「……………」

「女性ならではの武器もね……」

三沢の、穏やかな、しかしこちらの心を見透かそうとするかのような眼差しに、佐和子は、全身の筋肉が強張っていくのを覚えた。

「あなたに、それができますか？」

短い問いに、佐和子は息を呑んだ。伊集院満枝の言葉が蘇った。

……男は、その醜いものをもって、わたくしたち女のからだを刺し貫く。……からだを刺し貫かれるだけなら、まだ我慢するわ。心まで刺し貫かれるのは、まっぴらよ。

佐和子はその時、こう答えたのだった。

わたくしもいや……。

「三沢さん」

佐和子は口を開いた。

「たとえわたくしが、好きでもない男にからだを刺し貫かれることになっても……」

唇が震え始めた。

「それは……心まで刺し貫かれることにはならない。そうですよね？」

知らぬ間に眼が濡れていた。三沢はしばし佐和子を見つめ、深く頷いた。

その三日後から、佐和子はカフェに女給として勤めることとなった。目的は二つ。その稼ぎの一部を「党」に納めること。そして、「女ならではの武器」を、いずれ使うことになる日のために、磨き上げておくこと……。

カフェとは、その言葉の由来どおり、本来は珈琲コーヒーを供する店である。だが、多くのカフェの売

り物は飲み物ではなく女給であり、昼間は喫茶店、夜はバーに変貌する店が多く、警察の風俗係の管理下に置かれていた。

カフェ・スワンも、日が高い間は普通の喫茶店である。女給はいるが、多くのチップは見込めないし給料も安い。ただし、酔っぱらい客にからだを触られたり、酒臭い息で口説かれる危険からは免れられる。危険のなさを重要視する女性は昼間働き、報酬の多さを選ぶ女性は、夜から店に出る。

夕方五時近く。

猪俣佐和子は、いつものようにスワンの裏口から更衣室に入った。ここで、半袖のサテンのドレスに着替えエプロンをつける。和服にエプロンというのが女給のスタンダードであったが、スワンの売りは、女給の洋装姿だった。

「また、来てるわよ」

「直美なほみさん、昨夜も捕まっちゃって、ずいぶん閉口だったらしいわね」

店内をうかがいつつ噂し合う早番の女給たちに、佐和子は、おはよう、と声を掛け、どうしたの？ と訊ねた。

「あの女よ」

朋輩の女給が顎で示したテーブルに、コーヒーカーップを前に俯いて座る小百合の姿があった。

一昨日の夜に来たときは、男性客と一緒だったが、今日は独りきりのようだ。

「昨日も来たの？」

佐和子は訊ねた。彼女は一日おきの出勤で、昨日、小百合が直美を訪ねた時には休みだった。



「そうなの。夕方近くになると、ああやってやってきてコーヒー一杯でずいぶん粘って、直美姐さんにしつこくからむのですって。姐さん、だいぶおかんむりだったわよ」

「これで三日目だものね。家出娘を捜しているかなんか知らないけれど、ああやって黙って座っているだけだし……空気が悪くなっちゃうわ」

佐和子は店内をうかがった。他の客の姿はない。早番の女給たちはそそくさと更衣室に引き揚げ、着替えは始めている。

「あたしがお相手するわ」

佐和子は女給たちに言った。怪訝な顔をする彼女らに、うまく追い返してみせるから、直美姐さんが来たら、そう伝えておいて、と付け加え、店に出た。

「いらつしやいませ。里江と申します」

うつむく小百合の傍らに立ち、源氏名を名乗ってにこやかに挨拶した。この世界に飛び込んで半年、女らしい仕種や表情の作り方も、だいぶ板についてきたと、佐和子自身感じる。

「あ……」

見上げた小百合は、狼狽うろたえたように腰を浮かせた。やはり、自分のことを知っている……。佐和子は、そんな思いは微塵みじんも見せず、笑みを絶やさず向かい合って座った。

「家出した娘さんをお探しなんですってね」

「え、ええ……」

「直美姐さんから聞きました。そのためにわざわざ上京なされたんでしょ」

「は……はい……」

「余計なことかもしれないですけど、なんだか他人事とは思えませんわ。私も、家出同然に田舎を飛び出してきましたからね」

「そうなんですか……?」

「ええ」

佐和子は探るように小百合を見つめた。家族に内緒で上京し、以来連絡も取っていない。家出同然に上京したというのは嘘ではなかった。もし、このあか抜けない小娘が、佐和子のことを知っているのならば、なんらかのしるしを見せるはず。

果たして小百合は、佐和子から眼をそらし、唇をかすかに震わせている。

「十二歳の娘さんなんですってね」

「ええ……」

「背丈とか、からだつきは？」

「背丈は五尺くらい……からだつきは、普通です」

「十二歳にしては結構大きいのね。髪型は？」

「普通に、三つ編みにしていました……」

「どんな顔だち？」

「それも……普通の……」

「わかったわ」

佐和子は、エプロンの胸ポケットから紙片を取り出し、小百合の目の前に置いた。「そういう女の子を見た者がいないか、いろいろと訊ねてさしあげましょう」

「ほんとうですか？」

小百合は一瞬、眼を輝かせ、それから、何かに気づいたように口を噤んだ。胸騒ぎを必死にこらえているような面差しだった。

「ええ。何か分かったら、すぐにお伝えするわ。東京でお住まいの所番地と、あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

佐和子の問いに、小百合は動揺を隠しきれないようだった。

やはり、自分の正体を知られたくないのだ……。

佐和子をあえて、口調を荒げてみせた。

「正直、迷惑なんですよ。ここに来て、暗い顔をして座っていられると、お店の空気も悪くなりますしね」

小百合は身を縮めてうなだれた。その姿に、加虐心をくすぐられ、佐和子はさらに追い打ちをかけた。

「直美姐さんも、仕事にならないとこぼしてましてね……でも、あなたのお話を聞いていると、あんまり邪険にするのもおかしいそうだから、私が一肌脱ごうって言ってるんですよ」

「そうなんですか……」

蚊の鳴くような声の小百合に、佐和子は胸ポケットから鉛筆を抜き出し、突きつけた。

「ですから……ね。お名前と所番地を書いてくださいな」

谷中区根津一丁目……加藤寅次郎方、増田小百合。

その日の夜遅く、アパートに帰った佐和子は、細い丁寧な字で書かれた文字を眺めながら呟いた。

その名は、佐和子の記憶にはなかった。加藤寅次郎という人間にも心当たりがない。年かっこうから言って、女学校の後輩だろうか。だが、青森県から出てきたというからには、同郷ではなさそうだ。

三沢さんに頼んで調べてもらおうかしら。

「党」における佐和子の立場は、中央委員である三沢直属の「資金調達局」メンバーということになっていて。二日に一度、三沢の連絡員と街頭で会い、指令を受け取るようになっていて。事情は分からぬが、三沢はさまざまな方面に顔がきくらしい。行方をくらし、地下活動に従事する佐和子を探りに来た女が現れた。それだけで、調査を依頼するには十分な理由になるだろう。

翌朝、佐和子は小百合に書かせた紙片を懐に、連絡員と会うため、地味な和服を着て言問橋まで出かけた。関東大震災後、隅田川に架けられた長さ二三〇メートル、幅二二メートルの大橋で、これを渡れば浅草である。

連絡員はすでに来ていた。モダンガール姿の若い女性で、橋のたもとで所在なげに煙草をふかしている。佐和子が近づくと、手にしたハンドバッグを落とした。拾い上げて渡すと、ありがとうございます、と作文を読み上げるように口にし、耳元で囁いた。

「三沢さんからの指示です。明後日の夜、ここに行ってください」

そっと手渡されたのは、切符だった。「日布對抗拳闘大会」とある。

「右隣の席に植木という男が来ます。彼の指示に従うように」

「わかりました」

佐和子は頷き、懐から紙片を取り出して連絡員の女に渡した。

「そこに書かれた女の素性を調べてもらってください」

「女？」

怪訝そうな連絡員に、佐和子は説明した。

「カフェの客ですが、わたくしのことを知っているようなのです。わたくしは相手に見覚えがないのですが、幾度も店に来るんです」

「わかりました」

連絡員の女は、それきり、浅草の雑踏へと橋を渡って去っていった。